

博士論文審査および最終試験の結果

阿部賢一博士学位論文審査結果報告

審査委員（主査） 沓掛良彦



本学大学院博士後期課程に在学する阿部賢一氏によって提出された学位論文「イジー・コラーシュの詩学」は、本学の教授沓掛良彦（主査）、教授亀山郁夫、教授西永良成、教授水林章の4名の審査委員に、チェコ文学・文化の専門家である北海道大学国際情報メディア研究科助教授橋本 聡氏を加えた5名の審査委員が、その審査に当たった。審査委員全員が提出された学位論文を丹念に精読し、予備審査を経て、2月27日に本審査ならびに最終試験（口述試験）をおこなった。その結果、阿部氏の学位論文が、課程博士の学位論文として、今後この大学における文学研究の分野における博士論文のモデル足り得るほどの、きわめて高い水準に達しているという点で、審査委員全員の評価・見解が一致し、同氏に博士（文学）の学位を授与するのが妥当であるとの結論を得た。以下論文のテーマならびに概要、それに関する審査委員の評価・講評、さらには審査の過程ならびに口述試験において問題として指摘された点、今後の課題等について、その大要を報告する。

学位申請者阿部賢一氏は、未だ本学大学院博士後期課程に在学中であるが、既にわが国におけるチェコ文学研究の気鋭の研究者として注目すべき研究業績を挙げており、4年間にわたるカレル大学、パリ第四大学（スラヴ研究所）での研鑽を生かして、チェコ本国で学術雑誌に掲載された研究論文2篇、フランス語で執筆されパリ第4大学に提出されたDEA論文、フランスの学術雑誌に掲載された仏語論文1篇を含む7篇の学術論文を研究業績として有している。今回学位論文として提出された『イジー・コラーシュの詩学』は、阿部氏がこれまでにおこなってきたそれらの研究成果を踏まえ、「20世紀における詩のひとつの到達点を示している」と論者がみなしているチェコの詩人にしてコラージュ作家であるイジー・コラーシュの「詩学」の解明を、トータルな視点から試みた労作であり、創見に満ち、緻密にして完成度の高い題目すべき研究論文である。

[論文のテーマとその目指すところ]

まず本論文のテーマであるが、全体を通じて論じられ、その解明が試みられているのは、イジー・コラーシュという一人の芸術家における「ポエジー」とは何か、を明らかにしようとする「詩学」の探求である。20世紀におけるチェコの詩人として常に第一線に立って先鋭な詩作活動を展開し、実験的創作手法々々を模索、追求し続け、ついには言語を越えた表現手段によってポエジーを表現することに到達し、コラージュ作家としても広く知られるに至ったイジー・コラーシュ（1914年～2002年）の「詩学」の全容を解明しようという果敢な挑戦が、本論文にほかならない。イジー・コラーシュという詩人にしてコラージュ作家は、20世紀の

ヨーロッパにおいてもっとも先鋭な、前衛的芸術活動をおこなった存在として注目を浴びていたにもかかわらず、チェコにおいては社会主義体制の崩壊に至るまで（具体的には1970年以降1990年まで）チェコ国内では作品が公表禁止であったという事情もあって、チェコ本国を含め海外においても、未だ本格的な研究がなされてはこなかった。コラーシュに関する先行研究としては唯一体系的な研究書としてカルフィークによるもの（『イジー・コラーシュ』1994年）があるのみであって、それととも全作品へのアクセスがまだ困難であった時代に執筆されたため、全体として「作品照紹介」の域を出るものではなかった。全作品集がようやく完結を迎えようとしており、作品の検証作業を困難にしていた諸条件が劇的に緩和されたこの時点において、阿部氏はチェコ本国を含むヨーロッパの研究者たちに先駆けて、コラーシュが構築した「詩学」の全容と特質を明らかにすることを意図したのである。そのような壮大な野心作でもある本論文が目指しているのは、イジー・コラーシュの芸術を、受容美学的観点をも視野に入れつつ、作品が創造される過程を解明すること、その作業を通じて、詩人・芸術家としてのコラーシュの詩学・美学理念を浮かび上がらせ、同時に主要な作品に文学的・芸術論的意味づけをおこなうことである。さらには、言語芸術としての詩作から出発し、ついには言語を超えた言語外のコラージュという造形芸術のうちにポエジーを追及したコラーシュの「詩学」の特質を明らかにすることによって、20世紀における「詩学」全体への寄与をはかるうとするのも、論者阿部氏の意図するところとなっている。

[論文の構成と内容]

本文のみでも234頁に及ぶ大冊である本論文は、全体が三部から構成されている。第I部「軌跡」文学史的、芸術史的なパースペクティブによって、詩人・芸術家としてのコラーシュの創作活動の過程が丹念にたどられている。阿部氏はコラーシュが芸術活動をおこなった当時の資料や詩集刊行時の同時代の批評、未発表書簡等を縦横に駆使しつつ、時間軸に沿ってコラーシュが置かれたチェコの社会的・文化的状況、その芸術的発展、コラーシュが提起した芸術的、美学的問題を叙述し、詩人・芸術家としてのコラーシュがたどった軌跡を、チェコのみならず同時代の西ヨーロッパ文化を背景に置いて、描き出している。チェコにおいて生まれた「ポエティスム」、シュール・レアリスムの終わった地点から詩人・芸術家として出発したコラーシュが、やがて戦後社会主義体制の確立とともに弾圧され、文化的閉塞状況の中であってなお、芸術活動を制限されつつも己の「詩学」を模索し、詩におけるシニフィエよりもシニフィアンを重視する創作態度へと移行し、言語をオブジェ化したヴィジュアル・ポエトリーを創作するに至った過程が、鮮やかに浮き彫りにされている。さらには詩人コラーシュがラングによらない詩から「ありとあらゆるものによるポエジー」を求めて、最終的には言語を素材とした詩と決別し、彼が「明白な詩」た *evidentni poesie* と呼ぶ「コラージュの詩人」となった経緯が描かれる。ここで展開されている文学史的、芸術史的考察は、単にチェコのみならずフランス、イギリス、ドイツ、アメリカなどの同時代の欧米の前衛的詩人・

芸術家たちの創作活動にも広く目を配ってなされており、若年にもかかわらず阿部氏のヨーロッパ近・現代詩、現代芸術に関する造詣が、端倪すべからざるものであることが知られる。第II部「アルス・ポエティカ」は本論文の中樞をなす部分であり、詩を論じ、前衛的な「詩学」の特質を解明しようとする阿部氏の卓越した力量が、ここで遺憾なく発揮されている。1箇所である。110頁にわたって詩人コラーシュの代表的な詩作品が美学的な視点から精緻に分析、考察されている。個々の詩作品が、コラーシュの「詩学」、詩的理念の実現の例証として、原詩と論者によるその邦訳が掲げられ、それぞれの詩の言語、技法、響き、イメージなどにわたって微細に分析されている。その精密な詩の読みは、外国人研究者としての限界を全く感じさせないレベルに達している。ここではコラーシュが属した「グループ42」の美学である「都市のフォークロア」、証言やコラーシュがやむなく選んだ日記という形態に表出される「テキスト内とテキスト外の時間」、ヴァリエーションとパラフレーズという技法に着目した「他者のテキストと移行の原理」、ヴィジュアル・ポエトリーを特徴づけている「視覚の形而上学」、最後には「テキストにおける『詩人』と『わたし』の距離」という5つの観点が設定され、コラーシュの詩作品の特質が解明されている。この中において、「詩学」という概念を根本から問い直す契機となった、「読まれることを拒否し見られることを要求する」ヴィジュアル・ポエトリーとはいかなるものかを説き、コラーシュの詩学・詩的理念におけるその位置付けをおこなっていることは、ことにも重要である。ヨーロッパ詩の伝統である詩ひいては文学におけるミメシスという概念を拒絶し言語記号の線状性を否定したところから成り立ったヴィジュアル・ポエトリーの一極を担った詩人コラーシュの作品の革命的な意義が、ここで明らかにされているのである。さらには万人に解し得るポエジーを模索し続けたコラーシュが、「詩語」から、さらにはラングそのものから脱却し、それを越えた言語外素材によるポエジーの表出を目指す「コラーシュの詩人」、コラーシュ作家へと変貌してゆくその臨界点が、テキストと作品の綿密な分析を通じて鮮やかに照射されている。

最終章である第III部は、コラーシュのコラーシュ作品の分析と考察を通じて、20世紀芸術、就中「詩」における「コラーシュ」という概念を検討することに費やされている。ここではコラーシュ作家としてのコラーシュの具体的創作手法と、その芸術理論である『手法の辞典』の精密な分析がなされており、本質的に詩人であるこの芸術家が、ポエジーを追求し「新しい言葉」を言語外に模索した結果、ヴィジュアル・ポエトリー、コンクリート・ポエトリーを超えて、彼が「明白な詩」と名付けたありとあらゆるオブジェによる「言語」の創出へと逢着するに至った様相が、比較的簡潔ながら明快に述べられている。論者阿部氏はコラーシュが詩人として出発し、詩における「真正性」を追求した結果、他者の「証言」を自身の言葉に取り込む詩におけるコラーシュという技法に拠り、さらには「多角的な統一体」としての新たな芸術を標榜することによって、最終的には総合的かつ多視点的な芸術であるコラーシュにたどり着いたとの結論を得ている。<イジー・コラーシュは地上に存在するありとあらゆる生物の、そして物の、そしてありとあらゆる営為を「コラーシュ」といいう「ポエジー」の射程に収め

るのである。＞というのが、氏によるコラーシュの「詩学」解明の結語となっている。

〔論文の評価〕

前述のとおり、チェコの生んだイジー・コラーシュという詩人・芸術家は20世紀芸術においてきわめてユニークな位置を占めている重要な詩人・芸術家であるにもかかわらず、社会主義体制下のチェコにおける作品の公開禁止という不幸な状況に置かれたため、その本格的、体系的な研究がほとんどおこなわれてこなかった。本論文における阿部氏の第一の功績は、依拠するに足る先行研究がほとんど無きにひとしい困難な条件下で、みずからこの芸術家の全作品をつぶさに検証、考察し、これに精密な分析を加えて、その「詩学」・芸術理論を解明した点にある。未公開資料を含む研究資料を広く漁渉、収集し、全作品を通覧して独力でみずから論を構築し、広い視野に立ってコラーシュの「詩学」解明の努めたその非凡な力量は、論者の年齢を考えると実に驚嘆すべきものがある。チェコ文学を専門とする審査委員は、この果敢な試みを高く評価して、「日本語で書かれたこの論文は、チェコ語化、フランス語化されることで、ただちにコラーシュ研究の最重要文献の地位を得ることができるであろう」と述べているが、これは審査委員一同の一致した見解でもある。しかしこの論文の優れている点は、単にその先駆的などころにあるのではない。20世紀における詩学一般への寄与を目指すという本論文は、ヨーロッパ規模の大きな構想をもって書かれており、そのスケールの大きさが魅力のひとつもなっていることは、審査員全員が認めたところである。研究対象とされたコラーシュの芸術のみならず、この詩人の芸術活動を20世紀の大きな文化的・文学的、芸術的なコンテキストの中に位置付けて論ずるその視野の広さも、この論文の価値を高めていることは間違いない。チェコ文学・チェコの芸術のみならず、T・S. エリオット、マラルメ、アポリネール、アンドレ・ブルトンといった詩人たちへの自在かつ適格な言及や、ブラック、ピカソなどキュビズムの画家たちをもパースペクティブに収めての精緻な論考は、感服するに足るみごとな出来栄となっている。また第II部「アルス・ポエティカ」で展開されている、コラーシュの詩作品の精密な読みと分析は、阿部氏が卓越した語学力と優れた詩的感性を備えていることを示しており、この論文を魅力あるものとしている。また第III部で阿部氏が得た、コラーシュのコラージュはタダイスム的な無作為を目指すことなく、運命論者としてのこの芸術家の資質の表れだとした結論は、非常に優れたものだと評価もなされた。

阿部氏の論文は、全体としてこれを評するならば、コラーシュ研究の先鞭を付けた先駆的研究でありながら、翻訳・紹介型のレベルをはるかに脱した、独創性に満ちた緻密な芸術論となり得ているところにある。この論文をもって、20世紀における詩学一般への寄与をもなしたいという論者の意図は、ほぼ達成されていると評し得よう。チェコ語を母語としない日本人研究者であるという限界を全く感じさせず、またみずから毫もそれに甘んじることのない研究態度で貫かれているこの論文は、チェコ本国やヨーロッパでの評価にも十分耐える得るもので、国際的に十分に通用するだけの学術的な価値を備えたものと言えよう。

[指摘された問題点と今後の課題]

上記のとおり、この論文が博士学位論文としては傑出した出来栄のものであることは審査委員全員が認めるところであるが、にもかかわらずいくつかの問題とすべき点をはらんでいることもまた指摘せねばならない。問題として指摘されたのは、コラーシュの芸術を論ずるに当たって、阿部氏が西ヨーロッパにのみ視線を注ぎ、同時代に展開されたロシア・アヴァンギャルドの運動に目配りがなされておらず、コラージュ論においてソビエトロシアの非公式芸術への言及が見られないこと、また論者が研究の対象となった詩人の側に身を寄せ過ぎ、その芸術に審美的判断を下していないのは物足りないことなどである。詩学の理論的言説への迂回をもう少し緻密にする必要も指摘され、さらには分析の対象となっている詩のテキストへの肉薄そのがやや足りないとの批評もなされた。本来詩人であるコラーシュが、詩の破壊にもつながりかねない言語（ラング）と決別するという行為に行き着いた過程についても、それへの批判を含めてもう少し深く掘り下げて論じる必要があろう。

さらには論述の仕方、その文章に関しても、繰り返しが多すぎること、論述のスタイルに生硬なところが見られる、などの批判的な意見も出た。また詩を論ずる以上は、文章をより彫琢・錬磨することも求められるところである。

既に外国でも注目すべき研究論文を発表しているとはいえ、論者まだ博士課程の学生であるあることを考慮すれば、これらの欠点ないし不足とされる場所は、今後の精進によって十分に克服し得るものと思われる。いずれにせよ、阿部氏が未だ若年にしてヨーロッパの一線に立つ研究者と互角以上に渡り合える水準の研究論文を執筆し得たことに、審査委員一同が感服したことを記しておかねばならない。この論文はその性質上これをフランス語に翻訳して公刊し、広く国際的な場で批評を仰ぎ、学術論文としての価値を問うべきものとする。論者のその方面での努力が強く望まれる次第である。